塩ビと環境のメールマガジン VEC
No. 745
発行年月日：２０２３／３／２３

今週のメニュー

■トピックス
◇出前授業開催～福井県立若狭高等学校～

■随想
◇ららら、プラスチック　(9) 姉からの賀状 ～ 海洋プラ問題への取組みを！
前 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

■編集後記

■トピックス

◇出前授業開催～福井県立若狭高等学校～

出前授業は、代表的なプラスチックの性質や用途の学習を目的とした活動です。2020年から 2021 年にかけては、コロナ禍の影響で対面での出前授業は開催できませんでしたが、2022 年秋からコロナ感染者数が減少するタイミングを見ながら、徐々に再開され始めました。その様な中、３月７～８日、塩ビ工業・環境協会（VEC）は福井県立若狭高等学校で出前授業（１年生６クラス、200 人）を開催しました。

今回、出前授業を行った福井県立若狭高等学校は、明治 27 年創設、今年で 126 周年を迎える伝統校です。また、文科省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定され、『生徒自らの興味に基づく主体的な探究活動を進める』、『地域や企業等との協働を通して、課題解決に取り組むことのできる能力を養う』というカリキュラムポリシーの下に教育が実践されています。余談ですが、同校が開発した「鯖味付け缶詰」がJAXA の宇宙日本食に認証されています。

【講　義】

座学ではプラスチックの歴史と原料（石油資源）、特性、用途、リサイクルの現状、最近の技術などを紹介。

国内で消費される石油資源に占めるプラスチックの割合は僅か 3.7%である事。また、人類がプラスチックを使い始めてから約 50 年、大量消費・大量廃棄ではないプラスチックとの付き合い方をかえりみる時期に来ている事（今がリサイクルの正念場）などを紹介。

【実験①~消しゴム作り~】

学生たちにとって最も身近なプラスチック＝消しゴム 作りを体験（材料提供:㈱コバヤシ）。材料、加熱条件と樹脂の状態を電子顕微鏡写真で説明後、学生の皆さんには自分用の消しゴムを作成してもらい、個性的でカラフルな消しゴムに仕上がりました（写真右）。

消字性の良いもの、そうでもないものなどいろいろな出来栄えとなりましたが、実験を通して身近なプラスチック（塩ビ）に興味を持ってもらえたものと思います。

【実験②~プラスチックの比重分別~】

汎用プラスチックのシート（PE,PP,PVC,PS,PET）から試験片を切り出し、比重の異なる液体（水、飽和食塩水、50%エタノール）に投入し、試験片の浮き沈みをチェック。プラスチックが種類ごとに分別できることを体験。

その後、ペットボトルや電線のリサイクルプロセスで、比重分別が実際に行われていることを説明し、プラスチックの比重とリサイクルの関連性を実感できたものと思います。

授業は短い時間ではありましたが、授業に参加した学生のみなさんにプラスチックが私たちの豊かで衛生的な日常生活を支えていることを理解し、今後、客観的な視点からプラスチックの環境問題を見てくれるものと信じます。

我々（VEC）は、今回のような広報活動を積極的に継続し、少しでも塩ビに対する正しい理解をしてもらえるように活動します。引き続き、ご支援をお願いいたします。

■随想

◇ららら、プラスチック　（9）姉からの賀状 ～ 海洋プラ問題への取組みを！

前 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

この正月に、ふるさとの札幌に住む姉から賀状が届いた。読者の皆さんからは「今頃、賀状の話題か？」とお叱りを受けそうだが、私にとっては今回が 2023 年になって最初の寄稿なのでご容赦頂きたい。

賀状には印刷された新年の挨拶に加え、手書きでこんな一文が添えられていた。

「私もプラスチックはなるべく使わないように心がけていますが、菓子など売っているものが一番多く使われている現状　困ったものですね」（原文のまま）

札幌にはもう何年も帰っておらず（帰るところもない）、姉と仕事の話をする機会もなかったが、数年前に地元新聞社が「廃プラ削減に向けたレジ袋規制」というタイトルの紙上討論を企画し、私がプラ工連の専務理事として取材を受けたことがある。ちなみに紙上討論の相手は、全国で初めてプラスチック製レジ袋配布の禁止を条例で定めた京都府亀岡市の桂川市長だ。
姉はその記事を読み、私が廃プラスチックの問題に取り組んでいることを知ったようだが・・・「おいおい姉貴、俺は『プラスチックはなるべく使わないように』とは言っていないよ・・・」と苦笑い。

正月早々から廃プラの問題を突きつけられた2023年だが、1月末には川ごみの問題に取り組む環境団体から情報・意見交換会の案内をもらった。この会議にはプラ工連時代から毎年参加しているが、今年は予定があり欠席している。会議後、事務局から参加者からの意見や感想をまとめた資料を頂いたが、その中にドキッとさせられるこんな意見があった。
「プラスチック業界の方が言っていることは正論だが、正論に逃げている感は拭えない」
ここで言う”正論”とは、「プラスチックは私たちの生活に役立っている。プラスチックが悪いのではなく、ポイ捨てする人が悪い」といった我々業界サイドが口にしがちな言葉を指している。また上記の意見には「海岸の調査をしているとポイ捨て以外のプラスチックが多い」との言葉が続く。プラスチックが様々なところで役に立っていることは誰もが認める事実だが、我々がこれを言い過ぎると「業界は、プラごみ問題の責任を消費者に押しつけている！」と映ってしまうので注意が必要だ。
また、日本では使用済みプラスチックの回収・有効利用が進んでいることを理解している人たちからも、「回収・有効利用がこれだけ進んでいるのに、環境に流出するプラごみは減っていない。これを減らすには生産量を減らすしかない」との意見が発せられている。

最近は、昨年4月にプラスチック資源循環促進法が施行されたこともあり、様々な関連企業による使用済みプラの回収・リサイクルを目指すプロジェクトが進められている。これ自体は大いに歓迎すべきことだが、リサイクルばかりに目が行き、環境への流出を防ぐ対策を疎かにしてはならない。
レジ袋無料配布禁止の議論の際に、私たちは「無料配布の禁止により、実際に河川等に流出したレジ袋がどれだけ減ったかの検証が必要」と主張してきたが、今度は「リサイクルの推進で、プラスチックの環境への流出がどれだけ減らせたか」を問われる番だ。

プラスチックの環境への流出を防ぐことを前面に打ち出した業界の活動としては、日本プラスチック工業連盟による「海洋プラスチック問題の解決に向けた宣言活動」がある。現在58社・20団体が参加し、それぞれの活動を展開しているが、参加している企業数はまだまだ十分と言えるレベルではない。未参加の企業・団体には、是非参加して頂きたい。参加企業・団体の名称や活動の一部は、同連盟のホームページからも確認できる。(http://www.jpif.gr.jp/9sengen/sengen.htm)
具体的な取組みとしては社員による清掃活動が主だが、サプライチェーンを通じて

自社製品の環境流出の防止を呼びかける活動なども展開されている。また、清掃活動を通じて一人でも多くの社員＝消費者に実態を知ってもらうことで、企業人や消費者として次の一歩を考えるきっかけになることを期待している。

話は変わるが、2 月中旬には関東地方にかなりの雪が降り、我家の周辺も雪に覆われた。しかし、翌日は晴天で一気に気温も上がり、どこからか雪解け水の流れる音が聞こえてきた。この柔らかく懐かしい音を聞きながら、小学校に入学してすぐに習った歌「どこかで春が」を口ずさんでいた。雪国育ちの私にとって、水が流れる音は春の訪れそのものだったことを久し振りに思い出した。

どこかで春が

どこかで春が 生まれてる
どこかで水が 流れ出す

どこかで雲雀（ひばり）が鳴いている
どこかで芽の出る 音がする

山の三月 そよ風吹いて ※
どこかで春が 生まれてる

（作詞：百田宗治、作曲：草川信）
※原詩では「山の三月 東風（こち）吹いて」

■編集後記

2005 年 9 月から長年にわたり寄稿いただきました木下氏の随想【古代ヤマトの遠景】の掲載を終了いたします。木下氏は執筆活動を続けられ、今後は電子書籍での出版を計画されているそうです。これまで多くの寄稿文を掲載させていただき、読者の皆様を楽しませていただけたこと感謝いたします。長い間、ありがとうございました。

■関連リンク

- メールマガジンバックナンバー
- メールマガジン登録
- メールマガジン解除

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。

VEC VINYL ENVIRONMENTAL COUNCIL 塩ビ工業・環境協会
■東京都中央区新川 1-4-1
■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783
■URL https://www.vec.gr.jp ■E-MAIL info@vec.gr.jp